

波瀾万丈

東京部 上 脇 辰 則

私は、フィリピン、マスバテ島、アロロイ町で、五人の兄弟弟の三男として大正十年に生まれました。満四歳のころ、愛媛県大三島に一時帰国の際、小児麻痺にかかり、治療のため神戸、大阪、東京などの病院を回ったが治癒せず、ついにアメリカ、さらにはドイツの有名な先生しか治療できないことがわかり、著名な名医を訪ねて、三千里の船旅に出かけました。

太平洋を渡り、アメリカ大陸を横断し、大西洋を渡り着いたが、目的の先生が、何と皮肉なことに神戸に行っているとの確報に接したが、長旅は無駄でもなかったと思います。

なぜなら、紹介状を手に世界一周の旅となったからです。

帰国後、種々治療を受けましたが、後遺症は残りま

した。

先進国を歩き回り、技術知識不足を嘆き、勉強の必要性を痛感したその時点から、研究心が旺盛になり他人に分かるのに、なぜ自分は分からないのかと、悔しくなり、物理、科学、数学などに深い関心を持つようになりました。幸いフィリピン国立大学の海外留学試験に合格し、米国モンタナ州立モンタナ・スクール・オブ・マインズ行きの特待生に選考され、四年間の授業料、滞在費までフィリピン国費で一括送金されたが、残念ながら第二次世界大戦勃発により渡米できませんでした。国立フィリピン大学では、アメリカなどの外国の交換教授がおられて、選択が可能なので物理と数学はマサチューセッツ工業大学、化学はカリフォルニア大学など、世界の超一流大学の単位を取ったので、後の丸紅ニューヨーク支店勤務の際に有利でした。

昭和十六年、開戦となり皇軍入城後、渡集団軍政部に出頭し、在マニラ朝倉特務機関の機関長付を命ぜられ、アーミー・ネビー・Y M C Aを拠点に早速秘密作戦行動につきました。身分を隠すため大学に在籍し、

医学の予科三年、採鉱冶金、機械工学、電気工学の三学位を取得したことは幸いなことでした。それと並行して軍政下の大臣などへの渉外連絡、父の本来の仕事、すなわち石原産業海運株式会社マニラ支社長の手伝いなど、大変忙しく戦時中とはいえ充実した生活を送ることができました。当時、石原産業海運株式会社は南ルソン、パラカレ鉄鉱山で良質の鉄鉱石を採掘し、積み出していました。

一方、戦況は悪化しゲリラ活動が盛んとなり、鉄鉱石採掘もままならず、鉄鉱石・銅精鉱など積載の本船が、次々とバシー海峡で撃沈され、内地（日本）にはほとんど到着しない状況となりました。

このころ、野村大将の御子息野村大尉が主計長をしている九〇一海軍航空隊が、マニラ民間空港ニコルス空港隣接海岸に布陣した、との情報に接し、この部隊に協力することになり、私の得意な英語を生かし敵信傍受の任務に着任しました。ゲリラ部隊・基地・艦船・航空機相互間がほとんど生の英会話が使われ隠語などはわずかで、報告先は3KF（兄の所属第三南遣艦隊

司令部）でした。第九〇一航空隊とは下駄履き九六型水上偵察機が主力の偵察の部隊で、連日数回も発信偵察活動をしていました。ガンルーム（士官室）では、未帰還者の食食用お盆を裏返しご冥福を祈っており、裏返しお盆が日に日に増えていきました。

昭和十九年九月マニラ湾がグラマンF4Fなどによって初空襲に見舞われ、相当な被害を受けました。最初は予定通り友軍の演習かと思ったが、さすが航空隊の監視所から「敵機グラマンだ」との報告に接し、我々は民間人でありながら空襲の実戦を目の当たりに見て肝をつぶしました。当方は二〇ミリ機銃で応戦し、機銃弾運びを手伝い被弾戦死したのもいました。

敵信傍受の無線はさながら野球の実況放送のようで、次の標的艦艇が、攻撃される様を友軍艦艇に連絡するすべもなく、急降下で繰り返し爆撃並びに機銃などを乱射してきて、世にも恐ろしい体験をしました。海岸通りに作られた滑走路から発進した、我が方の戦闘機はいったいどうなったのか？

何回かの空襲後、レイテ湾上の空母へ帰還途中、石

原産業のパラカレ鉄鉱山にも銃爆撃を受け、相当な被害を被り、採掘もじり貧となり、ほぼ閉山状態にまで陥りました。

マニラ湾奇襲攻撃は敵ながらあつぱれでした。この日、我が海軍秘蔵の重巡「那智」、軽巡「木曾」、最新鋭の駆逐艦「皐月」「曙」「秋霜」「初春」「沖波」などが次々に撃沈され、艦の生き残り約三千人はしばらくの間重油にまみれ、無念の血を浴びて旧城内の一角に屯していました。

このころから第十四方面軍を尙武・振武・建武の三集団に分け、それぞれ北方山岳地帯・マニラ東方山地・クラークフィールド西方拠点に配置する命令が発せられ、マニラ在住の日本人婦女子・老人約八千人は中北部カガヤン河谷のバヨンボン地区に、強制疎開を命ぜられにわかに騒然としました。この移動のためルソン島の南北幹線道路は一大パニック状態になり、軍民を問わずトラック・乗用車などで大混雑に陥りました。

だが、マニラ地区には膨大な装備・資材があり、命令によれば、一カ月に運び出す処理量は次のとおり。

弾薬三千五百トン・兵器五百トン・爆薬二百トン・自動車部品千五百トン・糧秣四千五百トン・被服及び補修材料七百五十トン・消耗品四百トン・照明材料六十トン・衛生材料二百五十トン・獣医材料二百トン・紙幣百五十トン・硬貨五十トン・そのほか四百トン、総計一万二千九百六十トン、方面軍直轄トラックはわずか二百六十台、鉄道は一日平均四列車でぎりぎりの輸送計画だったが、もし空襲・ゲリラの妨害があつた場合には、たちまち作戦は狂う。この物資輸送のためマニラ・バギオ間は通常の倍以上十時間もかかり混乱を極め、また、この膨大な物資があつたので、車はあくまで強気で一般邦人婦女子を巻き込んだので悲劇が始まったのです。

我が家では父（辰也）がボンファルで二十年七月戦病死、長兄（辰夫）が第三南遣艦隊司令部で重傷、次兄（辰造）は十六師団の軍医となり、レイテで十九年九月戦死、三男私は本文の通り、四男の弟（辰幸）は暁部隊に所属し、バギオで二十年四月戦死、母はただ一人で一般婦女子と共に山へ入りました。このように

一家六人はバラバラで、いかにルソン島北部の山奥で苦勞したか、最後はどうであったか、人づてに聞くだけで残念ながら、詳細を書くには私にはありません。

かく言う私は、タフト・アベニュー街五〇六番地の正面真向かいの国立総合病院フィリピン・ジュネラル・ホスピタルのある、地上三階地下一階の自宅に一人で立てこもっていました。タフト・アベニューとは、マニラ中央郵便局を基点としたマニラの重要な南北幹線道路です。私は二月三日米軍のマニラ入城から約一週間にわたり、自宅の地下にあった電話交換機で陸・海・陸戦隊・マッキンレー司令部との電話交換台操作に励んでいました。

ある日の夜、ハプニングが起りました。我が家の前にジープが止まったので、これで運も尽きたと思っただが、決死の覚悟で「ホアット・ハーブン？」と声をかけると、ガソリンが切れ、ジープは放棄するとの返事でホッと、二世らしき二人の米兵が徒歩で立ち去り、無傷のジープが難なく手に入った次第です。手持ちのガソリンを補充、満タンにし、米軍規格二〇リッ

ター補助タンクにも補充して、いよいよ敵中突破への旅立ちです。

長年、共に暮らした現地人の女中・コック・下男・運転手らにそれぞれ米弗数千弗を手渡し、懐かしの住まいを後にタフト街をマッキンレー方向に、深夜灯火管制下の敵地を南下しました。

幸いなことに米軍戦車と軍用車の一団があり、その最後尾につけ南下すると、ニコルス飛行場のそばにバリケートがあり、米軍と現地民間人ゲリラらしき連中が猟銃・蛮刀などを持って検問に当たっているではありませんか。私はジープの中にあつた、米軍軍曹（サー・ジェント）の制服を着用していたが、日本人であることが分かる危険でした。しかし米軍軍隊用語は自信もあり、大学の軍事教練で命令や号令の掛け方も熟知していたので、問題はないと確信はしていました。さすがゲリラ、「こいつは日焼けしていない。怪しいぞ！」とタガログ語でまくしたてたが、デブの白人将校はなんのその「GO」と言ったので検問所は難なく簡単に突破することができ、気楽に口笛を吹き、友軍の

最前線であるマッキンレー基地にたどり着きました。

ところが一難去ってまた一難、今度は、日本側としては、真夜中にヘッドランプをつけた米軍のジープが勢いよく接近してくるので、小型サーチライトで照らし出し、軽機関銃の威嚇射撃を浴びせてくるのは無理からぬ行動と、停車して日本の小旗を振ったが、逆に怪しまれて、四、五人が走ってくるので、土手の下に隠れようとして足をすべらし水牛の泥沼に落ち込んで、気がついたら野戦病院のベッドにいました。私を知っている者がいて命拾いしました。戦利品のトレーラー付きジープは無傷でした。サン・マテオ經由モンタルバンに移動するためバシゲ町を経て東海岸に向かうのに、このジープは実に有り難い存在でした。しかも牽引されたトレーラーには、野営用キャンプ用品があり、後日山岳地域でのサバイバルには、これまた大変役に立ちました。

連日米軍のロッキードP38・グラマンF4F・その後F6Fに悩まされ、ついにはこのジープもマニラ会会員(六戸善作氏)のモンタルバン軍管理農場(六戸ファ-

ム)で被弾炎上しました。

モンタルバン水源地よりワワ・ダムからサントイネス高原を経て、東海岸のインファンタには川沿いになればよいとの情報を、関係者に流したところ、約十一万人がこのルートを通ったと思われます。このルートは陸軍正規地図には、人跡未踏と白抜きとなつていますが、私の個人所有の小型飛行機からの空中写真により判明していました。

初期の間、我々は海軍軍需部と行動が一緒だったので、航空隊で日常は贅沢な食事を取っており、食料・弾薬には何ら不自由はありませんでした。大和煮などの牛肉の缶詰も大量にあったが、重量もあり後方の洞窟基地に置き去りにし、たまに、決死隊を組み、これらの食料を洞窟までとりに行ったが、浅ましいことに友軍同志の戦闘になったこともありました。

東海岸沿いに北上したものは、インファンタ・ウラミイ・バレールなどに行った模様。私は東海岸のバナシ川沿いに、米潜水艦による物資揚陸基地跡らしき場所に定着布陣しました。一度は、潜水艦が接岸し

てきて、まんまとゴムボート十個分の食料など揚陸されたものを、手に入れたことがあります。二度目には何かの手順・隠語の間違いで怪しまれて物資をもらい損ねました。

この地区の原住民ネグリート族は禪をして蛮刀を持ち、着物のことを「キモナ」蛮刀は「カタナ」槍は「ヤ」といい、唇は分厚いが人懐こい人種で、我々にいろいろなことを教えてくれました。

野豚取りの罟の仕掛けで野豚を捕獲し干し肉作りを精を出し、魚も捕り食べることに全く不自由はしませんでした。また塩も、ドラム缶を縦割りにしたものを横に使い、塩焚き釜として海水から荒塩を作り、次にドラム缶の上を全部あげ、底は釘で無数の穴をあけて、藁・砂・布切れなどをに入れて、「にがり取りろ過装置」を完成させ塩を作りました。そしてここを通過する部隊全員に、乾燥豚肉と魚の干物と塩を配り好評を博しました。これも昔、ロビンソンクルーソーの本を読み、サバイバルに実践しただけです。我々の恩恵を被った連中が、後に捕虜キャンプで私の子分になり

ました。数多くの栄養失調の日本兵に貴重なもの配ったお陰で収容所では、負傷した兄が、逆に大変お世話になり、心の中で善行は大いに施すべしと一人喜んでいました。

終戦の昭和二十年八月十五日、偶然、海岸で仲間になったフィリピン人と釣りをしていたところ、アンダーソンゲリラ隊に捕まってしまいました。

インファンタのゲリラ本部で、日本の無条件降伏の情報に接し、早速、無線連絡でバギオ地区G K F（帝國海軍南西方面艦隊司令部）と連絡が取れ、近々、G K F関係特使が、山下司令官の代理と共にインファンタまでこられる由、アンダーソンゲリラ部隊内で連絡待ちの状態となりました。八月二十五日、小型機で正式な日本側の特使として、G K Fの海軍大尉武馬健太郎が山下閣下の命令書持参で到着し、無事武装解除指令が発せられ、整然と米軍に投降することになりました。不祥事は一切なかったことは、関係者一同キャンプ内でも周知の事実でありました。

早速、武馬大尉から長兄辰夫の消息を聞いたところ、

北部ルソン海軍総司令部の特使として米軍への連絡の途中、陸軍部隊若手将校から狙撃され重体と聞かされました。日本側には血気盛んなものもいるから、私も同じようなことがあるので、十分用心しろとのご忠告有り難く承りました。なるほど、捕虜收容所内でも何回か殴られたりいじめにあったが、私は体力と腕力に自信もあつたし、数多くの子分がいたのでさほど心配はありませんでした。

マニラ南方在カンルバン町のカランバ製糖会社保有の砂糖黍畑地に十三万人の捕虜が收容されました。名称はルソン・プリゾナー・オブ・ワー・キャンプ（LUPOW）でありました。所長はシュマッカー中佐で、従軍僧ミリケン大尉が補佐役でした。私は、九月中旬に捕虜（PW）ではなく、シビリアン・インタニー（C-I）として、この第二キャンプに收容されました。戦犯容疑者又は終戦以前から收容された者の第一キャンプとは隣り合わせで、後日、田島中将などが時たま運動のため散歩されている姿を、有刺鉄線越しにお見かけしました。

道路を挟んで向かいには、病院キャンプがあり、その端には、婦女子の收容所がありました。ここで無事だった母に会えたのは言うまでもありません。週末には母に会いに行くほか、用もないのに家族面会と称して在留邦人の女性知人、又は病院の看護婦さんなどと話し合いに足しげく通つたものです。これで険しい山中放浪をして苦しんだことも一瞬でも忘れることができました。ここで数多くの家族の消息を帰国後、留守宅への伝言を多数承りました。帰国後、確実に伝言伝達に成功したこと御礼のしがきをいただいて、お役に立ったことを今も誇りに思っております。

キャンプでは土木工事などの使役がありました。こども米兵リーダーとの通訳が多く、日本側の古参下士官とうまく組めば仕事も涉り、使役作業全員にチョコレート・タバコなど配給して皆に喜ばれ、私の使役班は有名な存在となりました。

そのころ、使役途中に、私に面会者だとの連絡で收容所本部に行くと、何と担架に乗せられているのは辰夫兄貴ではないか、腕は貫通銃創、頭は打撲傷、おま

けに言語障害で会話もろくにできない。この状態を敵から受けたのならいざしらず、味方にされたのだから憤りのやり場もない。「だが、もう心配するな。弟の僕が面倒を見るから」と言ってお慰め、私のテントの隣の場所を譲ってもらい、兄弟水入らずの収容所生活が始まりました。

昭和二十一年四月三日、二千人のPWが内地へ送還されることになりました。朝から米軍憲兵(MP)の手によって、送還者の手荷物検査が広場で行われ、各自、信玄袋を担いで整列し、持ち物点検に応じていました。収容所に着いたときは、何一つ所持することを禁じられ、一切の持ち物を没収された捕虜たちも、今では配給品や労力の報酬として得た物資でバッグはふくらんでいました。袋から手持ち財産が取り出され、さらけ出されました。貧しい故国を偲び、極力節約して蓄えた石鹸・歯ブラシ・歯磨粉・シェービングクリーム・安全かみそりや古新聞・古雑誌・友人名簿又は出所不明の米・煙草・時計といった禁制品も隠されていたのを、MPによって片っ端から取り上げられました。

これが、かつての日本人将校であったかと思うと、あさましくも思われたが、貧しく、うらぶれた妻子への贈り物として、恥も外聞も、忘れて集めたかと思えば、哀れになりいつしか目頭が熱くなりました。

やがて持ち物検査が終了後、八人の将官と二千人の将兵が大型トレーラーに分乗し、マニラ湾に向け出発しました。それをいつ帰れるとも分からない残留組の我々が、黒山のように群がって羨ましそうに眺めていました。今考えれば、岸壁の母の裏話のようでした。

たまたまこの日、森田正覚師が我々捕虜に対して、いつものように法話をした後、夕方、ラウドスピーカーが鳴って私はトムソン大尉に呼び出され、トムソン大尉のジープで、第四キャンプ(第二キャンプの裏手にあった将校用のキャンプ)に行っておられる、森田僧侶を迎えに行きました。うすうす察知していたものの、そこで初めて私の任務内容が判明しました。

それは初代比島軍司令官本間中将の銃殺刑と、独立混成第六十一旅団長田島中将の絞首刑の、立会人兼通訳ということでした。何と運命のいたずらかとしか思

いような悲しくもおそるべきことでした。ジープで戦犯収容所に行くと、夜目にもはっきりと、護送車に二人の男が引かれてきました。赤十字のマークの着いた救急車の護送車と、我々を乗せたジープが一路ロスパニョス方向の処刑場目指して疾走しました。

刑執行時間は十二時半ごろだと聞き、五時間ぐらいの間、私としては宗教家でもなく、一般人としてこのようなことは生まれて初めての経験です。ただ茫然として言われるまま、ロボットよろしく行動する以外ありませんでした。私の神経に耐えられるかどうか、自信はありませんでしたが、事ここに至っては真心こめてやる以外ありませんでした。

控え室にいと、シユマッカー司令官先導により、本間さんと田島さんが入ってこられました。本間さんは私に「君は父親や兄弟を戦死させたが、アメリカを憎んではならない。君はまだ若い。日本の再興を信じて逆に先進国アメリカを利用して、後世のためになる仕事をやり給え」と声をかけてくださいました。この言葉を忠実に守り、私の後々の進路の示唆となりました。

た。この後、私は本間中将と対座する形で椅子に座ると、英語の原文で、死刑執行命令書を読み上げられました。それから最後の夕食として、ウイスキー・ビフテキ・ビール・コーヒーなど出されました。執行準備完了との連絡までの数時間、森田僧侶の宗教的行事、一般的な話が交わされたが、二將軍のあまりにも落ち着いた態度は立派でした。

名射手待機の刑場に誘導され、医者診断で正確な心臓の位置に四インチ大の標的を貼り付け準備万端の際、黒い頭巾をかぶるのを断ったが、「マッカーサー君の命令となれば仕方がない」と頭巾をかぶり、「さあ、こい」との声と同時に銃声が轟きました。本間閣下の右に森田僧侶、左に上脇通訳兼立会人の下で行われたこの死刑執行は、何とバターン総攻撃の日、四月三日の午前一時でありました。田島中将絞首刑執行後、二遺体に乗せた病院車並びに森田・上脇両人のジープは深夜の国道をまっしぐらに戻り、あらかじめ米兵によって掘られた、婦女子収容所の横の墓穴に埋葬されました。

これらの事実は今後二十年間一切公表しないこと、との誓約書に署名させられ、内地に帰ってから毎月必ず謎の外人が現れて、過去一カ月一切しゃべらなかつたとの私の署名を求めてきました。この事は二十年間続きました。

昭和二十一年四月三日は、朝から二千人の内地送還があつたり、生涯忘れ得ぬ死刑執行の通訳兼立会人になつたり、収容所生活中の最も長い一日でありました。

本間中将以下三十三人の死刑立ち会いを終えた後、やっと、昭和二十一年八月、夢にもみた、待望の帰国の順番がきて、マニラ湾から錆び果てた駆逐艦甲板で船上の人となり、長崎に上陸後、支給されるまま千円だけいただいたて、自傷している兄の介抱をしながら、義兄のいる宝塚（姉錫子の嫁ぎ先）に行くため、帰路を急いでいたとき、またハブニングが起こりました。

三ノ宮での電車乗り換えを間違えて神戸駅で下車。岡山駅で五百円の西瓜を買つたため、もう切符を買う所持金はなし。日も暮れてきたので、途方にくれて、兄と二人で元町駅地下道に転がり込むことになりました

た。

八月の蒸し暑い日であったが、プラットホームに三十人ばかりルンペンがいたので、長老らしき白髪のじいさんに、仲間入りさせてくださいと挨拶したり、この人は大阪の有名な暴力団の神戸の手下で白髭親分と名乗る人で、気に入られてしまいました。早速、兄と二人、親分の隣に場所決定、知らぬ間に仲間入り。私は、体力もあり、技術知識もあるので、若手と共に「おでんや」の屋台を十台、十日間ぐらいで仕上げてしまいました。おでんやうどんの作り方を教わり、縄張りもはっきりと決まり、後はお客を待つばかり。これが物すごく繁盛して、私は一挙に若様と呼ばれる親分になってしまいました。毎日白髭親分と若様は屋台から屋台へと、上がりを集めて歩いて百円札が、たちまちリュックサックいっぱいとなり、ついに、東京銀行三ノ宮支店とアートロード支店に銀行口座まで開いた次第。お客がつく間はガードマンのまね事をして、三ノ宮警察派出所とも仲良くさせてもらいました。

一カ月もたったころだろうか、兄と散歩しながら向

こうからくる乞食のような汚い老婆を見たときに、「母だ」との兄の声で奇しくも母と巡り会えたのでした。内地に先に帰国している母に会い、その日、早速足を洗い堅気の社会に舞い戻りました。もし母と再会しなかったらどうなっていたでしょう。というのはいったんヤクザの世界に入ると縁を切ることは難しいのですが、白髭親分の理解もあり、ましてほとんど寝たきりの兄がいれば尚更です（この兄は昭和三十五年交通事故でなくなりました）。しかし金では買えない貴重な体験でした。別れ際にポストンバッグいっぱいのお札をもらったことはいまでもありません。

さて母に連れられて、宝塚南口にある石原産業海運株式会社社長石原新三郎氏の大邸宅につきました。石原家とは、父がマニラ石原産業の支社長であり、姉錫子が、社長夫人の弟佐々木栄一に嫁いでいる関係であります。早速、広い庭で焚き火を起こし、乞食同然の汗臭い着衣など焼き払って風呂に入れられ、離れの住人となり、やっとお手伝いさんなどから、「お坊ちゃま、お茶です、お食事です」と言われホッとしましたのも

束の間、「現金収入が無いので荷生活だから、どこかへ出かけて金を稼いでください」とおおり出されてしまいました。

早速、鉾山構内電車の経験もあるし、英語も抜群で、阪急電鉄宝塚線の白線の一両だけの進駐軍専用電車の運転手に採用され、梅田宝塚間の運転を一日交代でやりました。電車の乗客である進駐軍家族などと親しくなり、いろいろな食べ物など、もらい物があり楽しく勤めていました。収入もあり石原社長家族とも、やっとな並みに付き合えるようになりましたが、ある日不祥事が起こり、あおりを食って突然辞めることになり、石原社長のご紹介で、今度は業界一のハイヤー会社そごうの運転手となり、道は知らなくても助手席の助手が、教えてくれました。

ここで、丸紅社長との出会いがあります。ある日、丸紅の社長市川忍氏が、アメリカ人のお客様を京都にお連れするとのことで、私が選ばれて大型外車で京都に向かいました。社長と外人ともう一人の三人でした。技術面の話の英語の会話が全くかみ合わず、外人

のご機嫌が悪くなり困っているところ、私が運転手の分際で大変失礼とは思ったが、通訳を買って出て大変喜ばれました。

昭和二十一年、米軍大阪軍政部勤務となり、賠償部配属で管内の賠償指定工場を視察、報告のため大阪軍政部を訪問したが、何と大阪軍政部は石原産業本社ビルではないか。世にも不思議な奇遇です。その後、兵庫軍政部経済部在勤中、水田除草に使用の、二ノ四―D 実用実験を明石の農事試験場で成功裡に導き、石原産業と米国メーカーを技術提携させ、国産製造に踏み切りました。

このころ、マニラ時代の父の友人中西久次郎神戸支店長からのお誘いで、大建産業(株)神戸支店配属となり、丸紅に入社した次第です。丸紅本社に赴き、市川社長と森長副社長と面接でお会いしました。市川社長は先にハイヤーでお会いしているし、副社長はマニラ時代からの知己で、足は悪いが頭のいい奴と覚えていてくださって、保証人になっていただき採用となり、昭和二十四年に丸紅本社にご厄介になりました。すべて運

と努力のたまものです。丸紅でも貢献させていただきました。

一・二例を挙げますと、原子力関係では原子力課長として、アトミックス・インターナショナル社製ウオーターボラ型JRR-1、日本実験用原子炉第一号の契約納品にかかわる一切の業務の責任者として、科学技術庁・通産省などとの付き合いもできて幅を利かせました。その後半導体分野ではゲルマニウム時代からシリコンに変わり、そのシリコン単結晶を作るための原料の輸入並びに正式の輸入に関して約一年間、業界で市場を独占したことがあります。カナダ原子力公社と製品の独占的輸入販売権を取得、今も継続中。コバルト六〇などの放射性同位元素の独占輸入、又はウラン燃料用原料イエロウ・ケーキなどの輸入取扱いなど、技術関係での難しいものの取引には必ずかかわってききました。

富士銀行・日立などとシンクタンクを作らないかとの誘いで、昭和四十五年富士銀行主導で資本金五億円で、芙蓉グループ五十三社出資の芙蓉情報センターを

設立、初代の営業担当常務取締役を命ぜられました。役員任期二回計四年勤めた後、ロッキード事件もあり丸紅に業務本部・本部長付きとなり復帰したが定年で退社。

その後、スウェーデン系医療機械取扱いの商のモンソン商会で輸入販売の腕を磨きました。

その後、日本酒造関係で著名な大谷商店がフランスのバスラン社のワイン醸造用機器類の輸入販売を北海道富良野町役場との契約設立により手伝ってくれと丸紅時代の後輩山川君からの依頼で、山梨の醸造工場に出入りして、工程制御用のプリント基盤の修理などを行行、挙げ句の果て、日商岩井が輸出総代理店をやっていたエジプト向け福田電子の心電計の輸出の権利を取りました。日商岩井では十人がかりでの仕事を私人でやっていたのけ、葉事法など衣料関係をじっくりと勉強することができました。

その後、平塚に本社のある荒井商事(株)の貿易部門と企画部門の意見具申を行い、パソコンショップを開いたが時期尚早でした。本社社屋真向かいに三百台のバ

チンコ屋を始めて今も継続中。カリフォルニア産の野菜果物の輸入販売。これは大成功。定置網の漁業権も取得、大当たりで得た利益を海外送金して、カリフォルニア南部のローリング・ヒルスに豪邸を買うことができました。

その後、丸紅建設部のマニラ生まれの後輩笹原君より、土木建築関係の豊順洋行(株)で輸入業務をやらなにかとの話にのり、前任者の後を引き受け、豊通で十人の陣容輸入代行を依頼していたのを止め、豊通で十人の陣容でしていた仕事を二人でこなし、なお余裕がありました。米国関係の仕事も順調であったが、先代社長が昨年亡くなったこともあり、私も七十五歳になったので年貢の納め時と辞めさせていただきます。でもなお、じっとしていることができず、最後の奉仕として資本金三億二千万円の亜細亜保安機構(株)の取締役会長に就任し、最近までお手伝いをしていた次第です。

現在年金生活者ですが、振り返ってみると、何の苦勞もなく銀のさじをくわえて、この世に生まれてきたが、戦争のため肉親を亡くし、全財産を失いどん底生

活を経験しながらも、不思議な巡り合わせで、苦難の道を経験することなく今日まで来たことを、毎日感謝の念で父・母・長兄・姉・次兄・弟並びに多数の犠牲者諸氏に祈りを捧げ、合掌して本稿を閉じます。

【執筆者の横顔】

上脇辰則氏は、フィリピンのマスバテ島アロイで姉兄弟（五人）の三男として大正十年に生まれました。

御尊父辰也氏は、米系の鉾山会社のコンサルタント・エン지니어でした。金鉾山で当たり、マニラ日本人の間ではいわゆる金持ちと言えば上脇家を連想させるような存在でした。いつも頭髪を六、四に分け、白い背広に蝶ネクタイをしめ、格調高い身成りをした紳士との印象を強く持っていました。私の父三橋信作は土木建築業なので、タバオ・マンピシング鉾山の開発など、種々の事業を協同するほど親しい間柄でした。母君は上流婦人として毅然としたお方でした。

辰則氏は、四歳のとき小兒麻痺となられ、その治療のため世界一周の旅をした経験をはじめ、戦時中トレー

ラー付きのジープを棚からボタ餅式に入手したこと、終戦となった日、釣りをしていたため、捕虜となりいち早く状況を知り、連絡できたこと、捕虜収容所で十三万分の一の確率で白羽の矢を立てられ、本間中将の銃殺刑に立ち会われたこと、現在ただ一人残っている生き証人です。また、引き揚げてきたとき下車駅を間違えて、暴力団の仲間入りをしたことなど、その体験は枚挙にいとまがないほどです。

上脇氏は私や妹が通っていた、マニラ日本人学校の二年先輩です。子供のころ、足が悪かったそうですが、現在では見た目にはわからないので聞いて見ると、正常に歩けるように努力したそうです。小兒麻痺の後遺症で左足の不自由さにもめげず、よくぞ戦時中、五体満足な将兵に混じり、生き永らえたのには驚いた次第です。

上脇氏は愛国心・忠誠心・正義心の持ち主で、特に愛国心は外国育ちで、ジャップと言われ、なにくその反骨心を常に持っていたので、内地の人よりも強いと思われまます。また人情が厚いのでどんな苦況の中でも、

善行をしたので仲間から感謝されるなかなかの男です。

上協氏の労苦は、他の方のような悲劇の物語りではないのですが、軍の内部から見た違った角度からの貴重な一編だと思えます。

現在七十五歳、姑を見送った奥様と、女二人・男一人のお子様と、六人のお孫さんに囲まれた、お幸せな境涯です。

(東京都引揚者団体連合会)

理事 三橋 渡比丸)

比島敗走記

神奈川県 福井 勉

マニラ脱走

夕陽の美しいフィリピン・マニラの空に戦雲低く垂れこめて、夜ごと日ごと黒煙が覆う昭和十九年の暮れ、既に首都放棄を決意した軍は、マニラを捨てて続々と山中へ山中へと向かう。

汽車やトラック・乗用車はもちろん、およそ乗物という乗物は徴発されて軍用車となった。そして、それらが夜を日に次いで、弾薬と人員を満載して、敵機のしつこい追撃を避けながら、戦闘配備に就き始めたころはいろいろな流言が飛んで、さすがのん気なマニラ人たちも、めいめいの家財道具をカルテラ(馬が引く乗合馬車)に積んで郊外へと急ぐ。

市民のこうした動揺を目の前に見ながらも、ただ一筋に軍を信じつつも、次第に身の危険を感じ、治安の乱れ行くマニラの街に心細さを加えていくのは、在留婦女子であった。

父を、夫を、兄弟を、およそ男という男は一人残らず召集されて戦闘部署に就く。在留民はマニラ防衛司令部に召集。最後までマニラに踏みとどまって勇戦。ほとんど玉碎、残るはただ足手纏いの幼子たち。

軍が手薄になるとともに、市中至る所でテロ団の活動が日に日につのり、市内の治安は急速に悪化して夜も昼も拳銃弾が乱れ飛んだ。昨日まで親しかった現地の隣人、召使いも、既にことごとく今日の友ではなく